京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（3 年計画の 2 年目）

1. 研究課題

「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究

An Interdisciplinary Study on East Asian Works of Arts and Culture Concerning the Visible and/or Invisible Entities

2. 研究代表者氏名

外村　中

Sotomura Ataru

3. 研究期間

2019 年 4 月-2022 年 3 月(2 年目)

4. 研究目的

東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざすために、その前提として、あるいは「見えるもの」なのかもしれないが、普通であればまずは「見えない（と思われる）もの」にまつわる理論や事象について、従来の分野の枠組をこえて国際的にかつ学際的に探求することが、本研究の主な目的である。中でも仏身や道をめぐる議論は特に有効な指針を与えるものであるから、重点的にとりあげる。そして、様々な分野の研究者が一堂に会し、外来あるいは固有を問わず東アジアにおける多種多様な理論や思想から読み取られる共通点や相違点などを確認しながら、理論と作品との間に認められる矛盾点にも注意を払いつつ、上記の探求と関連する具体的な事例（特定の芸術作品など）を選定し、その文化史上における位置づけをおこない、実地に即した解釈のモデルをしめす。対象とする作品は、考古遺物から彫刻絵画、建築庭園、芸能音楽などにまで及ぶ予定である。

We carry out international and interdisciplinary research beyond the framework of the conventional academic fields, as a preparation for establishing a common basis to the understanding of works of arts and culture of East Asia. Researchers from various fields come together to explore theories and works concerning the visible and/or invisible entities, which are supposed to be invisible to ordinary people. Since, we think, discussions on Buddhist and Daoist theories give a particularly effective guideline, we lay special emphasis on them. We not only confirm common and different points explained in a variety of theories and thoughts,

no matter whether they may be indigenous or not, but also pay careful attention to contradictions, which may be recognized between theories and works. We select concrete examples (specific works of art etc) and position them in East Asian cultural history so as to show practical models of interpretation. The works, which we investigate, range from archaeological relics to sculptures, paintings, gardens, architecture, music, performing arts, etc.

5. 本年度の研究実施状況

本年度も班長の年間四度の来日に合わせて四回の研究会（6 月・9 月・12 月・3 月）を実施する計画を立てたが、コロナ禍で 6 月の第一回は 8 月に延期となり、最終的にオンラインで開催した。第二回以降も班長は資料蒐集のため来日を要したが、結果的に二週間の待機を経て研究所で副班長とともにオンラインで開催した。第二年次の本年度は仏典のほか儒・道の基本文献にも視野を拡げ、第一回は浄土三部経、第二回は『淮南子』『呂氏春秋』『易経』など、第三回は『老子』『荘子』『管子』『韓非子』『列子』などの文献とこれと関連する作品について検討を行った。班長入国時の待機にかかる滞在費で大幅な予算超過が生じたため、3 月開催分は通例の研究会ではなく当班の関連企画として、儒・道・仏に日本神道を加えた四宗教の交渉をテーマにしたオンライン形式の国際ワークショップ「中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの」を公開で開催した。当日は班長・副班長及び班員 2 名、計 4 名による研究発表と質疑応答が行われ、50 名の参加者があった。

6.本年度の研究実施内容

2020-08-22 浄土三部経などと関連作品 宋代仏画の「展開点」としての清浄華院「阿弥陀三尊像」-見える画像から見えない画像へ- 発表者 増記隆介 神戸大学 鏡像の考察―図像を見いだす― 発表者 瀧朝子 大和文華館

2020-08-23 浄土三部経などと関連作品 「浄土三部経」などが説く「見える」ものや「見えない」もの　西方浄土変は阿弥陀浄土を描いたものではない 発表者 外村中 ヴュルツブルク大学 「見える」浄土を「観る」―唐代西方浄土変と道綽 発表者 大西磨希子 佛教大学

2020-09-19 『淮南子』『呂氏春秋』『易経』などと関連作品 『淮南子』が説く「見える」ものと「見えない」もの　―道はまったく「見えない」もの― 発表者 外村中 ヴュルツブルク大学 漢代神仙思想と像の崇拝 発表者 森下章司 大手前大学

2020-09-20 『淮南子』『呂氏春秋』『易経』などと関連作品 見えない天意を何に見たか―正史五行志の役割 発表者 塚本明日香 岐阜大学 墓の中の「見えるもの」と「見えないもの」―漢魏晋墓の神坐と墓主図像― 発表者 向井佑介 京都大学

2020-12-26 『老子』『荘子』『管子』『韓非子』『列子』などと関連作品　外村中（ヴュルツブルク大学）道家（老荘）が説く「見える」ものや「見えない」もの：「一なる」もの

こそ「道」である 発表者 外村中 ヴュルツブルク大学 后稷は天に配せられたのか―『詩』大雅「生民」から『孝經』へ 発表者 古勝隆一 京都大学
2020-12-27 『老子』『荘子』『管子』『韓非子』『列子』などと関連作品 中国飲食史における〈炒める〉〈揚げる〉をめぐって―『斉民要術』から元代まで 発表者 高井たかね 京都大学 医家と道家の体内観 発表者 横手裕 東京大学
2021-03-28 国際ワークショップ：中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの 道家系と儒家系と伊勢神道の「一なる」もの：「一なる」ものは「道」か「気」か 発表者 外村中 ヴュルツブルク大学 仏像と道教像の図像的関係性再考 －南北朝～唐時代－ 発表者 齋藤龍一 大阪市立美術館 道学諸派における『太極図説』解釈 発表者 福谷彬 京都大学 北宋真宗期の仏教美術と三教理解－舎利荘厳を中心に－ 発表者 稲本泰生 京都大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

2021 年 3 月 28 日、関連行事として国際ワークショップ「中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの」をオンラインで開催し、班員 4 名による研究発表と質疑応答が行われた。50 名の参加者があった。発表者と題目は以下の通り。外村中「道家系と儒家系と伊勢神道の「一なる」もの：「一なる」ものは「道」か「気」か」、齋藤龍一「仏像と道教像の図像的関係性再考：南北朝～唐時代」、福谷彬「道学諸派における『太極図説』解釈」、稲本泰生「北宋真宗期の仏教美術と三教理解－舎利荘厳を中心に」。また、開催にあわせて『国際ワークショップ 参考資料集 仏教と道家系の「見える」ものや「見えない」もの』と題する冊子を刊行した。

8. 研究班員

所内

稲本泰生、岡村秀典、船山徹、安岡孝一、古勝隆一、倉本尚徳、向井佑介、高井たかね、福谷彬

学内

内記理（文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター）、マリア・カルロッタ・アヴァンツィ（文学研究科）

学外

大西磨希子（仏教大学）、大原嘉豊（京都国立博物館）、黄盼（中国社会科学院考古研究所）、重田みち（京都芸術大学）、清水健（東京国立博物館）、高橋早紀子（愛知学院大学）、瀧朝子（大和文華館）、田中健一（文化庁）、中西俊英（東大寺華厳学研究所）、中安真理（同志社大学）、西谷功（泉涌寺宝物館）、増記隆介（神戸大学）、森下章司（大手前大学）、横手裕（東京大学）、パトリシア・フィスター（日文研・名誉教授）、シビル・ギルモンド（ヴュルツブルク大学）、ベッティーナ・ゲーシュ（関西大学・甲南大学）、ガリア・トドロワ・ペドコワ（京都コンソ

ーシアム)、大平理紗(京都府立大学大学院文学研究科)、リサ・コチンスキー(南カリフォルニア大学)、折山桂子(九州国立博物館)、マリサ・リンネ(京都国立博物館・連携協力室)、ヒラリー・ピーダセン(同志社大)、魏藝(龍谷大学)、斎藤龍一(大阪市立美術館)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
学内（法人内）	11	11	1	3	2	1	56	5	11	5	5
		(2)	(1)			(1)	(12)	(5)			(5)
国立大学	3	3		1			16		7		
		(1)		(1)			(7)		(7)		
公立大学	1	1		1	1	1	6		6	6	6
		(1)		(1)	(1)	(1)	(6)		(6)	(6)	(6)
私立大学	7	7	2	2	2	2	37	11	12	12	7
		(6)	(2)	(2)	(2)	(2)	(33)	(11)	(12)	(12)	(7)
大学共同利用機関法人	1	1	1				1	1			
		(1)	(1)				(1)	(1)			
独立行政法人等公的研究機関	7	7	2	3	1		25	2	14	7	
		(3)	(2)	(2)	(1)		(9)	(2)	(7)	(7)	
民間機関	3	3					9				
		(1)					(4)				
外国機関	4	4	3	1	1		20	13	6	6	
		(3)	(3)	(1)	(1)		(13)	(13)	(6)	(6)	
その他											
計	37	37	9	11	7	4	170	32	56	36	18
		(18)	(9)	(7)	(5)	(4)	(85)	(32)	(38)	(31)	(18)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

最終年度である次年度は三回の研究会を実施し、併せて研究成果をとりまとめた論集の公刊に向け準備にあたる。6 月開催の第一回研究会は 2020 年 3 月に予定されていたがコロナ禍で延期となった「『般若経』『維摩経』『大智度論』と関連作品」の回を、改めて実施する。連続する二日間に一日あたり二本、計四本の研究発表を行い、最初の一本を班長、他三本を班員が担当する。第二回は 9 月、第三回は 3 月に開催し、これまでにカバーできなかった領域に関する各論の発表、及び参加者全員の討論を通して、3 年間の総括と展望を行う。

また関連企画として 12 月 10・11 日の両日、ドイツ研究振興協会（DFG）と日本学術振興会（JSPS）の助成を得て、日独二国間学術交流セミナー『美術史学・考古学から見た伝統東アジアにおける「見えない」ものの変容』を、班長が所属するドイツ・ヴュルツブルク大学

で開催することが確定している。同セミナーでは当班所属メンバーの若手・中堅研究者 7 名が研究発表し、これと同数のドイツ在住研究者と対論を行うことによって、伝統東アジアの芸術を解釈するための共通基盤の形成をめざす。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	2	8	320000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費	2	2	430000
	招へい旅費			
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				
消耗品等経費				
その他				
合計				750000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度は 3 年の研究期間中に研究発表を行った者が論文を執筆、これをとりまとめた書物を編集し、翌 2022 年度中に公刊する。関連企画としてドイツでの開催を計画している日独二国間学術交流セミナーでは、両国の主に若手の研究者が発表、対論することによって交流・連携を強め、両者の協力関係を軸に、将来的より本格的な共同研究を立ち上げる可能性を模索する。また当班には日本在住の外国人メンバー多数が参加している。この利点をいかし、芸術を含めた東洋文化史研究の国際的な拠点としての人文研の役割を、対外的にアピールすることに貢献したい。